

Saul について

原 裕 子

Robert Browning (1812—1889) の *Saul* は問題詩として、長詩を除いた彼の数多くの詩の中では文献が最も多いとされている。同時に彼の詩の特徴をよく表わし、主題探究には欠かせない資料となる。十年ほど前になるが、彼の ‘dramatic monologue’ (劇的独白) を中心に詩の展開を考察した拙論 *Christmas-Eve and Easter-Day* に、*Saul* の占める位置の重要性にふれたのであったが、その点に関して特に、アメリカの学者が新しい研究を世に問うているので、これを契機に、筆者なりの見解を述べてみたい。

まず、*Saul* の現行版は、19節から成る340余行の詩で、*Men and Women* (1855) に初めて完結した詩として載せられた。しかし、最初は *Bells and Pomegranates* と題する八冊の小冊子 (年刊) の第7巻 *Dramatic Romances and Lyrics* (1845) と *Poems* (1849) に、はじめの9節までが抒情詩として載り、残りの部分は1853-54年にローマで書かれ、*Men and Women* 第2巻に入れられ、後、1863年 *Lyrics* に、1868年 *Dramatic Lyrics* の中に収められた。これらは、すべて詩人自身が選んだ詩集である。一応9節までで詩としての体裁はなしているが、中途半端のまま十年近くも放っておいて、以上のように分類され、収録されたのは何故であろうか。この点でも、*Saul* が問題詩と見做される所以はある。

初期の作品 *Sordello* (1840) は、一個の人間の魂の展開 (*the development of a soul*) を描こうとする詩人の創作意識によって、わざと歴史的背景をぼやかし、用語も不明瞭で、解り難く、一貫性に乏しくなっていると云われているが、*Saul* に於ても、一人の人格サウルのおかれた状態を、劇的に展開させようとしているのだろうか。それにしても教訓的であるし、思想

とか観念を表わそうとしているのなら、教訓的であると同時に劇的であろうし、或いは、宗教的経験を抒情詩風に伝えようとしているのかもしれない、とも言われている。³

Saul は言うまでもなく、旧約聖書サムエル 前書16章14節から23節の記述に基づいている。イスラエル民族最初の王サウルは、尊信していた予言者サムエルと交りを絶ち、神に遠ざかり、悪霊につかれたのである。そこで臣下の勧めによって牧童ダビデを招き、豎琴の妙技で王の病を癒やしたという。従って、この詩をサウルとダビデの会合の物語的な記録であるとも言えるし、サウルを奇蹟的に死—精神的な—から甦らせたことから、広義の宗教詩、あるいは神秘詩ととれるかもしれない。とに角、サウルの心の病がダビデによって癒やされ、イスラエルの軍に復帰したことが話の筋である。

ところで、この詩の前半が書かれた1845年という年は、彼が Elizabeth Barrett に初めて会った年である。5月20日に会い、*Bells and Pomegranates*、第7巻が出たのはその年の11月6日であるが、これに先立つ1月に、女流詩人としての彼女の詩に傾倒していた彼は、“the fresh strange music, the affluent language, the exquisite pathos, and the brave new thought...”（新鮮な耳新しい音楽、ゆたかな言葉、絶妙な情意、そして勇敢な新思想）といって、彼女の詩を激賞した。この詩というのは、創作年代からして、*A Rhapsody of Life's Progress* (1844) らしく、ブラウニングの伝記著者 Betty Miller は、バレットのこの詩の一節と、*Saul* の第9節とを比較して、二つの詩の中にもり込まれた精神、韻律、用語、構文など、非常に類似していることを指摘している。彼女はまた、*Saul* を読んで、彼に次の様な意見を書き送っている。⁴

But your “Saul” is unobjectionable as far as I can see,
my dear friend. He was tormented by an evil spirit—
but how, we are not told...and the consolation is not obliged

to be definite,... (August 27, 1845)

(しかし貴方の「サウル」は、私の理解する限りでは、当りさわりがありませんね。彼は悪霊にとりつかれ苦しみました。でもどういう風にかは私たちには分かりません。それに、その苦しみに対する慰癒が別にはつきりしていないんですから。)

一方、この詩が、不運な一生を遂げた才人 Christopher Smart (1722-71) の最大の抒情詩 *A Song to David* (1763) に影響されたことも確かである。生活の面ではだらしない、悪評高いスマート (the untidy and largely disreputable⁵) の才能を認め、彼の詩を称えて、*Parleying with Certain People of Importance in their Day* (1887) (「当時重きをなした人々との会談」) の中で、スマートのことを次の様にうたっている。

Such Success

Befell Smart only out of throngs between
Milton and Keats that donned the singing-dress—
Smart, solely of such songmen, pierced the screen
Twixt thing and word, lit language straight from soul,—
(*Parleying with Christopher Smart*, vi)

(詩人の衣を身にまとったミルトンとキーツの間で、
こんなに成功したのはスマートだけだ。この様な詩人のうちで、
スマートだけは物と言葉との間の隔てを貫き、
魂から直ちに言語の火をともした。)

そして、

The man was sound
And sane at starting: all at once the ground
Gave way beneath his step, a certain smoke
Curled up and caught him, or perhaps down broke

A fireball wrapping flesh and spirit both
In conflagration.

• • •

and the untransfigured man
Resumed sobriety,—as he began,
So did he end nor alter pace, not he!

(*Ibid.*, v)

(当初彼は健全だった。
突然彼の足もとの地面が沈んで、
煙が立ちのぼり、彼を捕えた、
或いは、多分、火の玉が砕け落ちて、
肉も霊も大火の中に包んでしまったのだろう。)

• • •

そして変貌しなかった彼は
しらふにもどった、——はじめの様に、
終りも、同じ歩調をくずさずに。)
はじめ心身共に健全だったスマートが、突然青天のへきれきの如く靈感を受けて、唯一無比の一大抒情詩、*A Song to David* を作り上げ、また並の人間にもどったことを比喩的に言っているようだ。

Saul が *A Song to David* に多分に影響を受けていることは、取材の点でもさることながら、語句に於ても見られる。例えば、*Saul* の前半では、自然の中の生き物についてうたわれる—sheep とか、 quail, cricket, jerboa など。そして、 “God made all the creatures and gave them our love and our fear, / To give sign, we and they are his children, one family here. (6) (神はあらゆる生き物を創り、彼らにわれらの愛と恐れを与えられた。われらも彼らも同じ家の子であることを知らせるために。)

A Song to David では、はじめに詩人がダビデの性格、美点について称

え、ダビデが神をうたい、天使をうたい、人をうたったこと、その人とは、
“the semblance and effect / Of God and Love—” (xx) (神に似るもの、
神の愛の成果) であると。つづいて世界をうたう。樹木、草花、鳥類、
—quail, domestic cock, raven, swan, jay など。次に、魚類、獣類—
beaver, tyger, kid などについて。そして、宝石については、スマートは
‘gems’ という語を用い、ブラウニングは ‘jewels’ といっているが、それら
のもつ意味には共通性がある。

Of gems—their virtue and their price,
Which hid in earth from man’s device,
 Their darts of lustre sheathe;
The jasper of the master’s stamp
The topaz blazing like a lamp
 Among the mines beneath.

(*A Song to David*, xxvi)

(宝石—そのひめられた効能と真価は、
埋もれたまま掘り出されなければ、
 その閃めきもおおわれているだけだ。
王者の風格をもつ碧玉や
深い坑の中にともし火の如く
 光を放つ黄玉など。)

つづいて、堅琴をとって膝まづいたダビデは狂ったサウルの苦悶をとり去り、
サウルの心身を取り戻すのである。

Blest was the tenderness he felt,
When to his graceful harp he knelt,
 And did for audience call;
When Satan with his hand he quell’d,
And in serene suspence he held

The frantic throes of Saul.

(*Ibid.*, xxvii)

(彼が優雅な豎琴をとって、
膝まづきながら謁見を求めたとき、
絃を弾いてサタンを鎮め、
狂ったサウルの苦悶を
みごとに抑えとどめたとき、
彼のやさしさはたたえらるべきだ。)

*Saul*に於ては、7節で人生における様々な行事の時のうた—薊取りの節、酒の歌、挽歌、婚礼の祝いうた、軍隊の行進、祭壇をのぼる時の合唱—をダビデがうたい上げた時、サウルは、初めて生のきざしを見せるのである。それまでは、“so agonized, drear and stark, blind and dumb” (4) であったサウルが、この時はじめて“groaned”するのである。そして、サウルは慄き、天幕が震える。

—and sparkles 'gan dart

From the jewels that woke in his turban at once with a start—
All its lordly male-sapphires, and rubies courageous at heart.

(8)

(—火花は

頭巾にかけた宝石から閃きはじめた—
威厳ある青玉、勇気に燃える紅玉、
俄にゆらめいて。)

そして、

On one head, all the beauty and strength, love and rage,
like the throe
That, a-work in the rock, helps its labour, and leds
the gold go :

High ambition and deeds which surpass it, fame crowning
it,—all

Brought to blaze on the head of one creature—King Saul!

(9)

(一つの頭に、あらゆる美も力も、愛も怒りも、

あたかも

岩石の中に働く労苦が、辛うじて黄金を

もち来らす如く、

栄光は、高尚な望みと、これにまさる

功績をたたえつつ、

凡てはサウル王の頭上に輝くべくもたらされた。)

Saul の前半は、ここで終わっている。最後の四行が、初版と現行版とで殊に異なるので、論をすすめる便宜上、初版のものをここに載せておく。

On one head the joy and the pride, even rage like

the throe

That opes the rock, helps its glad labour, and lets

the gold go—

And ambition that sees a man lead it,—oh, all of

these—all

Combine to unite in one creature—Saul!

C. スマートと時代を同じくする Thomas Chatterton (1752-70) についても、ブラウニングは、好意と共感をよせている。チャタトンの18年の短い生涯は、自殺という行為によってその終止符がうたれたのであったが、その間に驚くべき詩を表わし、スマートと同じく、まさにロマンティックの先駆をなした。ブラウニングの *Essay on Chatterton* は、彼の散文批評として

は最初のもので、余り世に認められることなく、今世紀に入って初めて公にされたのであるが、もとは、*Foreign Quarterly Review* の1842年7月号に載せられたものである。この *Essay* 中で、

Poor Chatterton's life was not the Lie it is so universally supposed to have been; nor did he "perish in the pride" of refusing to surrender Falsehood and enter on the way of Truth.⁶

(チャタトンは世間で考えられていた様に偽りの人生を終えたのではない。また、虚偽に屈し、真実の道に入ることを拒むという「思い上った気持のまま朽ち果てた」のでもない。)

といい、彼の歩んだ方向を、「他にはけ口のない衝動への自由な道を得るという考えが、あらゆる文学作品に含まれている」(that the very notion of obtaining a free way for impulses that can find vent in no other channel, ... is implied in all literary production)⁷ という事実をブラウニングは受けとめ、チャタトンが *Rowley Poems* という題で、中世の詩と見せかけたことに対して、彼の弁護をしている。

Some Chatterton shall have the luck
Of calling Rowley into life!⁸

(チャタトンという人は、ロウリィを生み出す
めぐり合わせを得るのだ。)

ともうたっている。

のち、ブラウニングの有名な *Essay on Shelley* で、詩人としての彼の方向づけが明らかとなり、詩論としても、高く評価された散文として不朽のものとなるが、これは、1851年に書かれたもので、*Saul* 前半に関する限りでは、余り関連性はない。前半の影響は何ととっても愛妻エリザベス、そして C. スマート、T. チャタトンといった何れも死後可成時を経てからその真価を認められた詩人、性格的には欠陥があるが、独自の個性的才能をもった人物から受けたものである。動物を愛し、自然の生き物に広い趣味をもって

いた詩人の母親の感化も大きいと思われる。

彼が9節まで書いた *Saul* をそのままにして、十年近くの空白があったことについては、様々な見解があり、Collins もそれを中心に論じているが、（その間に、*Essay on Shelley* と *Christmas-Eve and Easter-Day* を書いてはいるが）病弱なバレットと1846年結婚し、英国を出奔して、気候の良いイタリーに住みつき、作ることよりも生きることに義務と喜びを感じていたことも一つの理由ではある。

I intend by God's help to live wholly for you; to spend my whole energies in reducing to practice the feeling which occupies me, and in the practical operation of which the other work I had intended to do will be found included—facilitated.⁹

（僕は一生をかけて貴女のために生きようと思う。心一ぱいの感情をつかいならし、僕がかつて為そうとした他の仕事も含み、すらすら運ぶような実際の働きに全精力をつかって。）

しかし、以上の理由からだけではない。前にも引き合いに出したバレットの手紙による *Saul* についての意見によって、彼は宗教上の、そして文学上の行き詰りを解決しなければならなかったのだ。Collins の説によると、詩人自身、サウル王の苦悩した魂を鎮めるために要求された宗教的慰めを引き出す文学的方法の適用を如何にすべきか分らなかったし、サウルを癒すのに効果をもたらすダビデの立場にも、確信がもてなかったのだ。初期の作品は—*Saul* 前半も含めて—彼にとって詩の技法と、詩の精神とが、同等の重要性をもっていることを示しているのに対し、この時期に入った彼の作品に於ては、詩の精神から方法へと移ってゆく。即ち、理論から実践へと考えられてゆくのである。

用語についても、前半では、具体的な語、感覚的な語、例えば *tent*, *hand*, *man*, *head* などが頻ばんに使われているのに対し、後半では概念的な語、

new, right, perfect, good, great, almighty, whole などが用いられている。先に引用した *Saul* 9 節の最後の四行が、初版では “the joy and pride” となっているが、後の版では “the beauty and strength, love...” と書き直されている。また、一行おいて、 “And ambition that sees a man lead it—oh, all of these—all” が、現行版では、 “high ambition and deeds which surpass it, fame crowning it,—all” と、感覚的な語から概念的な語に変わったばかりでなく、表現にも明らかな変化が見られる。

サウルが暗黒の天幕の奥にいることは、彼の精神の死を象徴し、そこに一条の光がさし込んで、彼の所在を示す。後半は、主にダビデの予言が中心となるのであるが、題の示す通り、これはあくまでもサウルを中心に行われるのである。サウルを一個の人間として、自覚をうながし、ダビデが名を呼ぶと、徐々に彼のいつもの動作と、王者らしい風格、習慣が戻ってくる。口こそきかないが、手をあげ、その手をダビデの傍に力なくさし出し、まるで人が花をじっと愛でるかのように、優しい目ざしをダビデに向ける。ここに至って、ダビデは豎琴を置き、予言にかかるのである。

Our dates shall we slight,
When their juice brings a cure for all sorrow? or care
for the plight
Of the palm's self whose slow growth produced them?
not so! stem and branch
Shall decay, nor be known in their place, while the
palm-wine shall staunch
Every wound of man's spirit in winter, I pour thee such
wine.

. . .

No! again a long draught of my soul-wine! look forth
o'er the years—

Thou hast done now with eyes for the actual; begin
with the seer's!

(13)

(彼らの甘汁があらゆる悲しみを癒やしてくれるのに、
われらはこの実をいやしむのか、この実は
しゅろの幹を支える努力の成果ではないのか、いや、
幹と枝は朽ち果てても、そのしゅろの酒は、
冬に人の心の痛みを止めてくれるだろう、
私は今あなたにその様な酒を注ごう。

• • •

いや、再びわが靈酒を飲みなさい、そして時却の行途を眺めなさい。
あなたはもう現実を見る眼を捨てた。

(今予言者の眼で見なさい。)

ここで 'wine' は象徴的に使われている。感覚力のある肉体の生命を意味
すると言われ、ダビデを励ました靈酒と同じ効用をもたらしている。ダビデ
の予言によるキリスト再来のヴィジョンによって、サウルが甦り、帰途につ
く時、夜が白々と明け、周囲が新らしく息吹き、あらゆる創造物の再生をも
象徴しているようである。

前半までは、もっぱら現実の生活—自然の中に生きる小動物、人間の実生
活に於ける労働、そして人間の熱望する生活 "wild joys of living, ambi-
tion and deeds" (9 節) についてうたい上げた牧童詩人ダビデが、後半の
完結篇では未来の予想 "praise of unborn generation" (13 節)、来世の報
いと休息 "the next world's reward and repose" (17 節)、そして、キリ
ストの愛—救世主の出現についての予言 (18 節) と、思想上にも明白な区別
がつけられている。後半は、確かにブラウニング自身のものとして、或解決
がなされているようだ。

J. H. Millerは、ブラウニングの‘dramatic monologue’について、次の様な見方をしている。

The dramatic monologue is not simply technical discovery or adaptation, chosen because it makes possible vividness and immediacy, or some other objective value. The decision to write dramatic monologues is Browning's way of dealing with his own existential problem.¹¹

（『劇的独白』は単に技巧上の発見でも適用でもない。新鮮で直接的な表現を可能にし、又、客観的な価値を可能にするために選ばれた方法である。『劇的独白』を書こうと決意したのは、ブラウニング自身の実存主義の問題を扱う方法としてである。）

更に、これは歴史主義の一段とすぐれた文学上の類型（par excellence the literary genre of historicism）¹²でもあると述べている。

詩人ブラウニングの自然観、世界観が、ワーズワスのそれと異なるのは、後者が、自然の霊を彼自身の霊と共感させるのに対し、前者は、自然と人間とはかけ離れた存在であることを明らかにしている点であろう。即ち、神との対決の不可能であることを認め、あらゆる生き物の目的は、限りある中で、無限の神を現わすことであると悟る。人間は無にも等しい存在であり、神が形成力をもっている。神は世界において、二つの場に存在している。一つは聖なるものの自足の完全性、即ち超越した神（transcendent God）であり、もう一つは、彼の創造した万物の内に在る神（immanent God）である。この二つの存在の間には空虚（vacancy）がある。一方に protoplasm（原型質）があり、他方に protoplast（原型質体）があって、その間に不完全な凡ゆるものが存在する。神と神により創られたもの双方に対して、自己と環境の釣り合いが、大きなわざわいをまねがれるのだ。彼がキリストのヴィジョンを暗示することにより解決しようとする時—前半では未解決のまま残された問題を—‘dramatic monologue’ という彼の手法が生かされるの

は、一つには、人間の不完全性、人間が虫けら同様に価値のない存在として自覚されるような場合、特に効を奏するとも言える。

彼の描く人物、又、彼の魅かれる人物は、必ずと言ってよいほど何らかの欠点をもった並の人間である。サウルは弱味をもった人間であり、決して王者としてではない。そして、ダビデはあくまでも語り手であり、サウルを救うために遣わされた琴弾きの青年詩人にすぎない。スマートの *A Song to David* は、ダビデへの讃歌であり、一貫して神とダビデへの絶大な讃美に終始している。それはこの詩が、当時宗教詩として応募されたものであるから、宗教性が強くうち出されているのは当然である。ブラウニングも熱心な福音主義者 (Evangelical) ではあったが、彼の *Saul* は、聖書の記述に忠実な解釈で書かれたものではなく、ダビデという、のち神意によってサウルに代ってイスラエルの王となるべき人を称えたものでもなく、彼の 'dramatic monologue' にそって考えられたものとみた方が妥当であろう。

O Saul, it shall be

A Face like my face that received thee: a Man

like me,

Thou shall love and be loved by, for ever! a Hand

like this hand

Shall throw open the gates of new life to thee!

See the Christ stand!

(18)

(おお、サウルよ、

わが顔の如き顔があなたを迎え、われの如き人を、

あなたは愛し、あなたは彼に愛せられるでしょう、永久に。

この手の如き手が

あなたに新生の門を開くでしょう。

ごらんなさい、キリストが立って居られるのを。)

これが *Saul* のクライマックスとも言うべき一節、神の再現(Incarnation)を予言したものである。スマートの “the semblance and effect / Of God and Love” は、詩人がダビデについてのもつ愛であるが、*Saul* のこの一節は、神の愛が一個の人間ダビデの愛によって招き入れられるのである。

Do I find love so full in my nature, God's ultimate gift,
That I doubt his own love can compete with it? here,
the parts shifts?

Here, the creature surpass the Creator, the end, what
Began? —

(17)

(最後の恩恵である愛が私の本性に充ちているので、
神御自身の愛にも匹敵するほどではなかろうか。ここに
主客は転倒する。

ここに被造物は創造主にまさり、結局は、神にまさらないだろうか。)

人間性と自然—神—との共感、ブラウニングの思想としてはごく稀である。それで、彼は神の力ではなく、ダビデの力(愛)によってこの偉業が為されたことを強調しているようだ。ここでは、ダビデとイエス・キリストがほとんど同一視されている。“Face” と “face”, “Hand” と “hand” と、大文字と小文字によってその相違を表わしている。彼の詩に於て、詩人自身の態度はさほど重要でない。彼は教理を進めてゆくのに、読者にそれを信じ込ませようとしているのではなく、登場人物に信じているように感じさせているのだ、¹³ という King の説は、ダビデの場合にも当てはめることができよう。Mrs Orr との対話の中で、彼はキリスト教を、「作り話かもしれない。しかし、私はそれにもかかわらず、キリストの生涯—死と復活—は、何か人間性が求めているものを供給してくれると思う。そして、それは真実であると確信している。」又、「神の愛—十字架上の—のみが、人間的な慈愛と献身と

いう崇高な行為によって、人間の心に訴えかけることが可能であるし、キリストの十字架と受難の事実(又は空想)がそういった啓示を与えてくれる。¹⁴」とも言っている。彼にとって救世主の再現が、単にキリスト教の理解ではなく、一般的に人間感情として受けとめられているのである。だから、Fairchildが、「今まで Evangelical であったブラウニングが、Broad Church man (広教会派) になった。」¹⁵と述べているのだろう。

ブラウニングの詩の中心主題「愛」は、第一作 *Paulin* (1832) からはじまる全作品に共通したものと言えるが「愛」をめぐって追究された詩想の展開は、‘dramatic monologue’ という表現形式による subjective と objective の融合である。初期の作品に於ける人間個人の self と unself の関係、即ち、自我という知的な自覚と、自己を中心にしないで認められる自我、主観的自我と、客観的自我である。Sordello が、達することは出来なかったが最後まで追求した自己中心から、自分が他に含まれることによって、自己の中に他の意識が併存することである。

Saul の前半と後半の間に書かれた唯一の詩、*Christmas-Eve and Easter-Day* で達した確信は、「愛」を medium として救われるものであった。“Love lay within it and without/To clasp thee”¹⁶は、神の二つの場、Transcendent God と Immanent God と同等の立場におかれている。この二つの詩で共通に予言される Incarnation についてのヴィジョンは、*Saul* 前半で未解決の問題を解く重要な鍵となったのであった。

〔註〕

1. Thomas J. Collins: *Robert Browning's Moral-Aesthetic Theory* 1833—1855 (Univ. of Nebraska Press 1967)
2. J. Hillis Miller: *The Disappearance of God* (Harvard Univ Press 1963), p. 90参照

3. Roma J. King, Jr.: *The Bow and the Lyre; the Art of Robert Browning*
(Univ. of Michigan Press 1957), p. 103
4. *Robert Browning; A Portrait* (John Murray, London 1952), pp. 178—179
参照
5. Ifcr Evans: *A Short History of English Literature* (Staples Press,
London 1949), p. 38 参照
6. Donald Smalley (ed.): *Browning's Essay on Chatterton* (Harvard Univ.
Press 1948), pp. 109—110
7. *Ibid.*, p. 116
8. *Waring*, ll. 195—196 in *Dramatic Romances and Lyrics* (1845)
ブラウニングの詩の中で、チャタトンについてうたわれているのはこれだけ
ある。
9. Miller: *A Portrait*, p. 134
10. Collins: *Moral-Aesthetic Theory*, p. 91 参照
11. J. H. Miller: *The Disappearance of God*, p. 100
12. *Ibid.*, p. 108
13. Roma J. King: *The Bow and the Lyre*, p. 108
14. Hoxie Neale Fairchild: *Religious Trends in English Poetry*; vol. iv: 1830
—1880 (Columbia Univ. Press 1957), p. 145 参照
15. *Ibid.*, p. 144 参照
16. *Easter-Day*, xxx